
はちみつ入りのミルクティー

ミルクココア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はちみつ入りのミルクティー

【Nコード】

N8187M

【作者名】

ミルクココア

【あらすじ】

空に浮かぶ雲がミルクティー色に見えた少女、未来のお話。

ミルクティー色の空は、とてもおいしそう。
陽の光を浴びてキラキラ光る雲は、はちみつをかけたお砂糖みた
い。

渡り廊下を歩きながら、未来みらいは考えていた。

「あの雲は、はちみつ入りのミルクティーの味がするんだろうなっ」
「もう、未来、また変なこと言ってる」

未来のクラスメイト、由希ゆきは、未来がおかしなことばかり言うの
で、頬を膨らませる。

「雲は雨を降らせるんだから、水でできてるの！ そんな味しない
よ」

「そんなことないもん。甘いマシユマロを溶かしたみたいな色をし
てるの、由希ちゃんも見えるでしょ？」

由希は、空を見上げる。

のどかな昼下がりの空には、澄んだ青と、太陽の光を反射する金
色の雲があつた。

おいしそうではないけれど、とても綺麗だ。

「……いい色は、してるけど」

由希は小さな声で呟くと、教科書を胸に抱えて、走り去ってしま
った。

未来は、彼女が去った後も、手すりに寄りかかりながら、幸せそ
うに空を眺めていた。

はちみつみたいな空を見ていた未来は、不意に空から、ピンを抱
えた小さな妖精が、羽をパタパタさせながら降りてくるのを見つけ
た。

ビンの中には、ミルクティーがたっぷり入っている。

妖精は、未来にビンを差し出した。

「これ、あげるわ」

「いいの？」

未来は、初めて出会う妖精にびっくりしながらも、白い湯気をあげるミルクティーに釘付けになった。

それは、空と似た色をしている。

「わぁー、いただきますっ」

未来は妖精からビンを受け取ると、ミルクティーを飲んだ。

はちみつみたいに甘くて、心の中までぽかぽかするような味だった。

「おいしかった！　ありがとう、妖精さん」

「どういたしまして」

空になったビンを持って、妖精が空へ戻ろうとすると、未来は慌てて引き止めた。

「ねえ、どうして、私にをくれたの？」

妖精は、くるりと振り向いて、未来の傍まで寄ってきた。

「はちみつ入りのミルクティーが飲みたそうだったからよ」

自分の体より少し小さいくらいの、妖精にとってはとても大きな空ビンを胸の前で抱えながら、妖精はにっこり笑う。

「あなたが喜んでくれたら、私も嬉しいわ」

「はちみつ入りのミルクティー、妖精さんが雲で作ったの？」

未来の問いかけに、妖精は頷く。

「ええ、私が作ったの。こんな天気の日には、とてもおいしくできるわ」

「そっかぁ。ありがとう、妖精さん！」

キラキラした瞳でお礼を言う未来に、妖精は、とびっきりの笑顔を見せると、くるくると回って飛びながら、上空へと戻ってしまっ

た。

未来は、予鈴が鳴るのも構わずに、妖精の姿が見えなくなるまで

見送った。

教室に戻った未来は、隣の席にいる由希に小突かれる。

「未来、ギリギリだよ。まだ空を見てたの？」

「うんっ。すぐおいしかった！」

未来は、大好きなものを食べた後みたいなの、幸せな顔をしている。
「……え？」

何のことを言っているのか聞き出す前に、先生が教室へ入ってきて、授業が始まった。

穏やかな午後の空は、おいしそうな、はちみつ入りのミルクティ
―色を雲を浮かべていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8187m/>

はちみつ入りのミルクティー

2010年10月13日23時01分発行